

元和年間における石見銀山道路網の復原

—大森地区を中心として—

3 回生 木戸真之

I. はじめに

石見銀山は1526年に博多の豪商である神屋寿禎によって本格的な開発が進められ、大航海時代の真ただ中である1620～1640年代に最盛期を迎える。関ヶ原の戦い以降、幕府の支配下に置かれ、奉行として派遣された大久保長安のもとで鉱山経営が行われた。西洋で作成された日本地図にも石見銀山の記載が見られ、江戸時代に作成された絵図からも銀山を取り囲む柵や口屋など当時の鉱山支配の仕組みが伺える。中でも元和石見国絵図は現存する石見地方の国絵図のうち最も詳細な記載がされている。元和国絵図に描かれている郡村名や石高などの詳細及び寛永石見国絵図との内容比較は「元和年間作成の石見国絵図について」（川村, 1999）において示されている。特に大森地区については街道が放射状に伸びており、道路網の中心であったことが分かる。また、『続 石見銀山を読む』（鳥谷, 2018）では、元和から寛永・正保にかけての口屋の変遷について分布図を使って検討している。そして、温泉津における口屋が元和から正保にかけて増加していること、温泉津以外の場所でも同様に増加していることを明らかにし、銀山の最盛期に領内各所を監視し、支配経営の強化を図ったと考えられると結んでいる。しかし、作成された分布図には口屋を通っている街道の記載がされていない。そのため、本稿では、石見元和国絵図をベースとして、大森銀山を中心に当時の道路網を復原する。その際、街道だけでなく、道路網で重要な施設である番所にあたる「口屋」の分布についても検討する。それによって、当時の石見銀山及びその周辺の空間構造がどのようになっていたかを明らかにする。さらに、「口屋」の位置する集落を取り上げ、「口屋」や集落の特徴を明らかにしていきたい。

口屋の位置する集落については^{おぎわら}荻原地区と^{まじ}馬路地区を取り上げる。この地区を取り挙げた理由についてであるが、荻原地区においては、大森銀山を出て最初の荷継場であったこと。そして、それと関連して宿場町としての発展が見られるため、陸上交通における口屋及び宿場町の規模が分かるのではないかと考えた。馬路地区については、荻原地区とは異なり、山陰道に面しており、口屋についても港に面した口屋であると考えられる。口屋が陸上と港にそれぞれ属し、異なる街道沿いに面するという対照的な2地区について詳しく見ていき、比較検討していきたい。

II. 元和石見国絵図の分析

先述したように、現存する石見地方の国絵図の中で「石見元和国絵図」は、銀生産の中

心である大森地区が最も大きく描かれており、口屋などの道路網に関わる情報が多く記載がされている。この絵図の作成時期については、元和3（1617）年から同5（1619）年までの間であると考えられている。本稿では大森銀山地域を中心に取り上げる。図1では、街道の通る町のみを挙げ、その中でも口屋の描かれている町を赤文字で示している。朱線で描かれた街道は大森銀山地域を中心にいくつも伸びていることが分かる。また、所々に口屋と木戸の記載も見られる。そして、図1に描かれている街道と街道の通る町、及び口屋を現在の地図に復原したものが図2である。当時の主要な街道は銀山街道と山陰道であり、大森銀山から放射状に街道が伸びているのがわかる。大森銀山を出て、荻原や濱原を経由し、酒谷から出雲国赤名村へと抜けているが、これが銀山街道であり、瀬戸内の尾道へ通じている。馬路や宅野浦、温泉津を通る図1でいうとL字型の街道が山陰道であり、海岸沿いに浜田や長門へと通じている。そのほか、大森銀山を出て、三久須や祖式を経た後、河下へと続いている街道は最終的に久喜銀山へ、佐木へと続いている街道は最終的に津和野へと続いている。大森銀山を出て、久利を通り、大田南で大田北と大田嘉土へ分岐している街道がある。大田北へと続く道は途中山陰道と合流して仙山から出雲国田儀へ向かっており、大田嘉土へと続く道は再び山中、市原に分岐している。山中へと続く道は神原を経由して出雲国田儀へ、市原へと続く道は円城寺や多根を三瓶山の東側へ抜けている。大森銀山を出て、戸蔵から志学へと伸びる街道は出雲国山口村に続いている。毛利が銀山を統治していた時代では銀は貨幣として運ばれ、銀山を中心とした交通体系が成立していた。それと対照的に江戸時代では貨幣を鑄造するために銀が運ばれ、その途中に銀の荷継や往来する人の宿泊、休憩を行う宿場町が発展した。その代表的な町が荻原や濱原である。周辺の村単位でのローカルな市場が活発化したのである。銀を運ぶための街道から、銀を使うための街道へと中世から近世において重要性が変化していったといえる。つまり、江戸時代において港へと向かう街道や尾道へと向かう街道は、大森銀山にとって重要であったと同時にその途中の宿場町にとっても重要だったのである。

大森銀山の柵内を拡大すると、柵内を囲むように口屋が設けられており、それぞれに名称が記載されていることがわかる（図2、表1）。蔵泉寺口屋から伸びる街道は荻原、三久須、佐摩、大國へと続いている。清水口屋から伸びる街道は荻原と三久須へと続き、そね口屋と水落口屋、本谷口屋、及びはきのたを口屋から伸びる街道はいずれも三久須へと続いている。とちはた口屋から伸びる街道は祖式へと続き、坂根口屋から伸びる街道は西田へと続いている。はた口屋から伸びる街道は馬路へと続いており、現在登録されている鞆ヶ浦道の大森から出る場所と一致している。よしさこ口屋から伸びる街道は大國へと続き、山陰道に合流している。

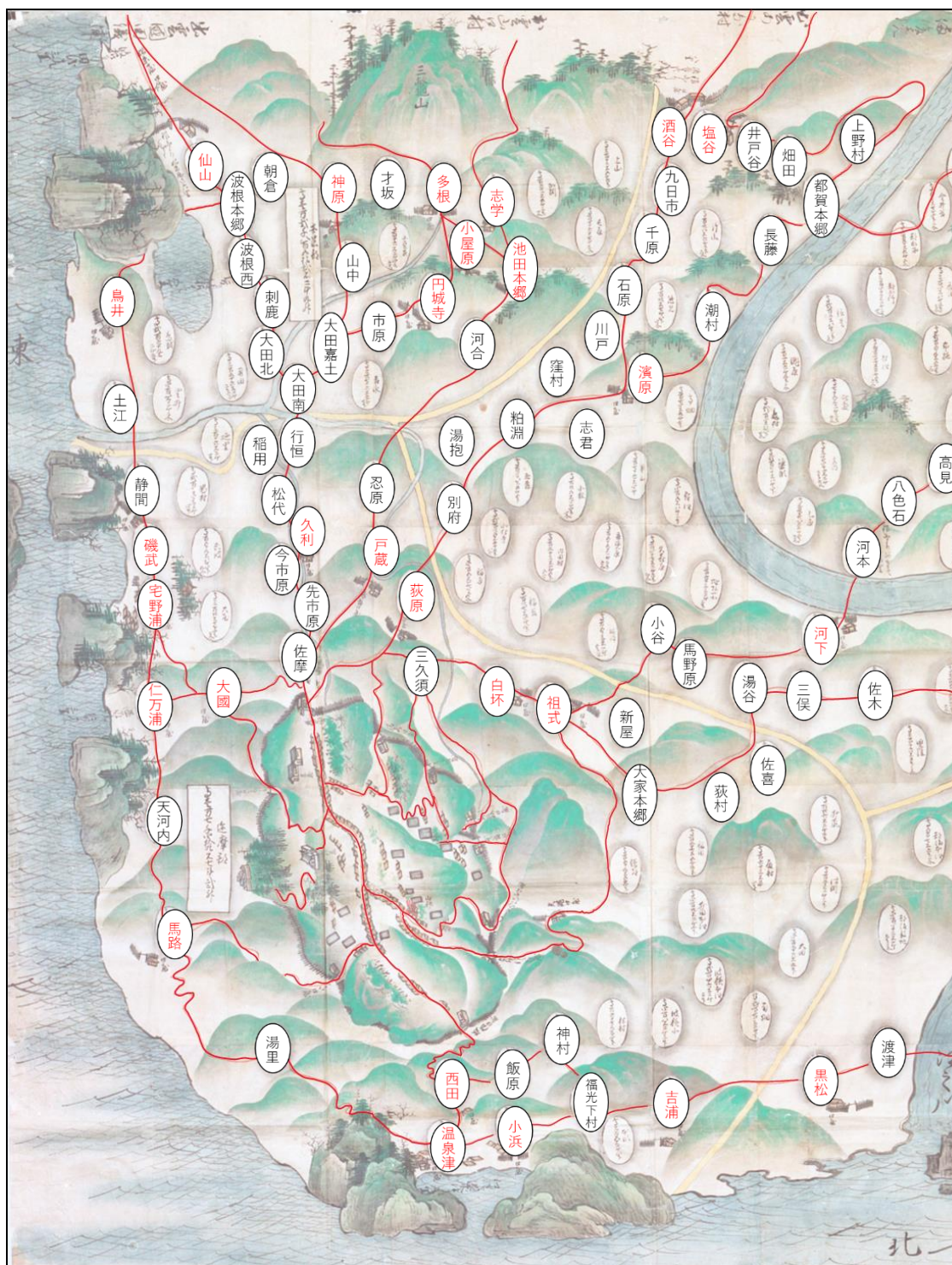


図1 元和石見国絵図における街道と地名

(浜田市教育委員会所蔵「元和石見国絵図」をもとに作成)

注) 街道の通っている町を加筆、赤色は口屋の確認できる地名

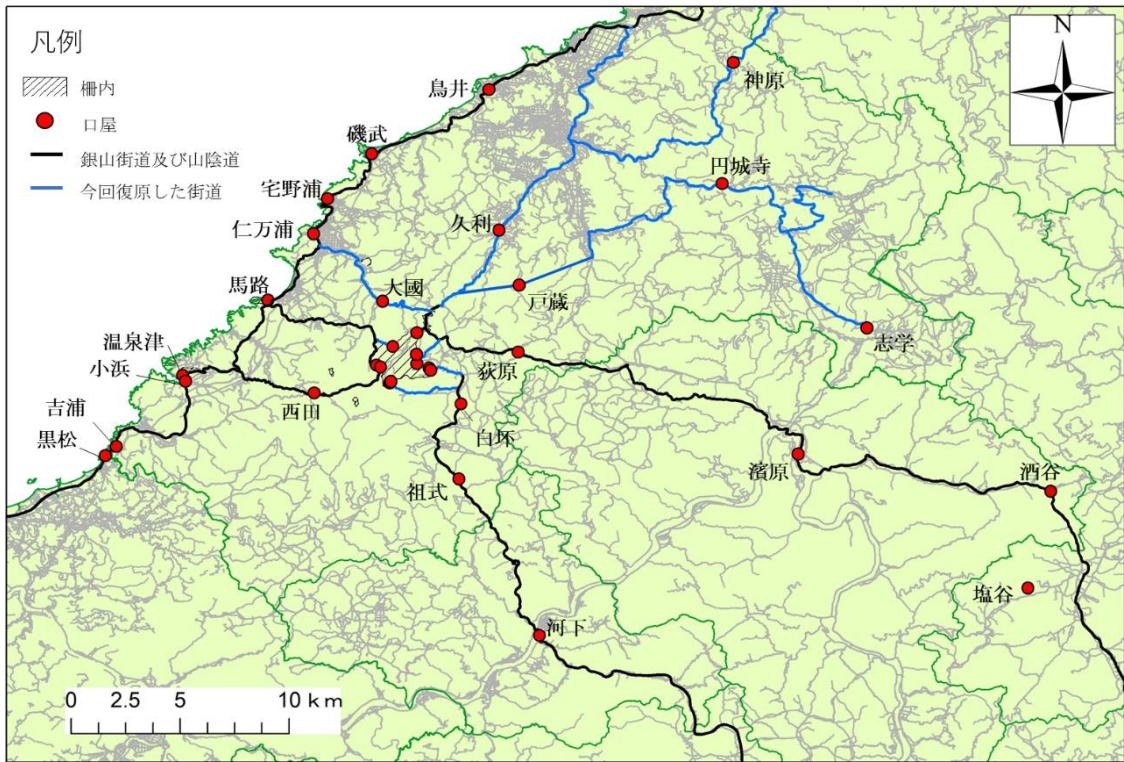


図2 元和年間における大森地区周辺の口屋の分布と街道の復原
 (出典：島根県教育委員会 『島根県歴史の道調査報告書第二集 山陰道Ⅱ』
 島根県教育委員会 『島根県歴史の道調査報告書第三集 銀山街道』)

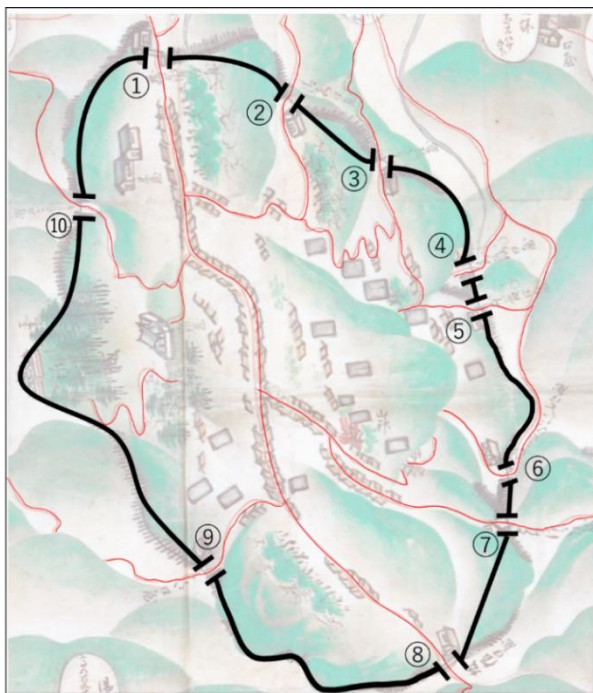


図3 柵内を囲む口屋
 (浜田市教育委員会所蔵「元和石見国絵図」をもとに
 柵、木戸及び街道を加筆)

表1 柵内を囲む口屋の名称

番号	口屋名
1	蔵泉寺口屋
2	清水口屋
3	そね口屋
4	水落口屋
5	本谷口屋
6	はきのたを口屋
7	とちはた口屋
8	坂根口屋
9	はた口屋
10	よしさこ口屋

(出典：石見銀山パンフレット
 「石見銀山遺跡の概要」)

Ⅲ. 口屋の分布について

本章では口屋の分布について検討する。口屋とは銀山領内の諸商売・諸荷物に対する税の徴収や銀の抜け荷などの取り締まりを行う番所のことである。元和石見国絵図で口屋の描かれている地名とそこを通る街道を現在の地図上に示したのが図2である。口屋は銀山柵内に密集しており、それを取り囲むようにさらに口屋が分布している様子が読みとれるが、大きく分けて4つの種類に分けられるのではないかと考えた。一つが銀山柵内を囲む蔵泉寺口屋などの10か所の口屋、つまり銀山に最も近い場所で接している口屋。次に仙山や酒谷など国境にある口屋。そして荻原や戸蔵などその中間地点にある口屋である。実際、正保石見国絵図には、銀山を囲む口屋には表1で示した口屋の名称が、国境や江の川の境には「外輪」、その中間にある口屋には「中通」と記載されている。元和石見国絵図においてはこのような記載はされていないものの、銀山から近い場所（柵内）、遠い場所（外輪）、その中間（中通）という口屋の分布の構造（図4）が元和石見国絵図からも読みとれるのではないかと考えた。しかし、この「中通」については現時点であまり詳しいことはわかっておらず、その機能についても原田（2011）は銀山御料の内において徴収された駄賃場役などを徴収した番所であったと推測している。そして、もう一つ挙げるとするならば、馬路や温泉津などの海岸沿いにある口屋であろう。近世以降、海に面した口屋には陸上の口屋と同様に税の取り立てや抜け荷の取り締まりの他に外国船の見張りといった海防の役割もあった。つまり、陸路では柵内、中通、外輪という三重の監視体制、そして陸上の口屋とは海防の役割も兼ね備えていたという面で少し機能的に異なる海岸沿いの口屋という4種類の口屋によって大森銀山を取り囲んでいた。当時はこのような空間構造が大森銀山を中心に広がっていた。

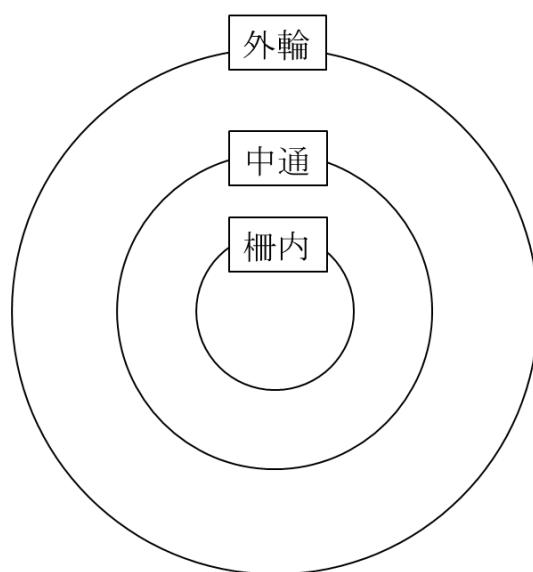


図4 口屋分布の概念図

IV. 荻原地区における街道と宿場町の復原

荻原地区は大森銀山を出て最初の荷継場として宿場町が発展したことで知られ、「荻原千軒」とも呼ばれたことからその繁栄が伺える。荻原地区については原田洋一郎氏の書籍『近世日本における鉱物資源開発の展開：その地域的背景』の第5章「幕府直轄銀山、石見銀山の存続とその周辺地域」及び「石見銀山周辺における「町」を持つ村に関する基礎的研究」（原田 2010）で比較的詳しく触れられている。この文献では明治初期の地引絵図を分析し、荻原の繁栄を明らかにしている。本稿では同資料を再分析した上で、筆者が現地調査した際に入手した資料を使い、現在の地図に反映させたものを提示する。その際、地籍図に記載されている屋敷のなかでも現在、地図上で確認できるもののみを提示する。

図5の「荻原村地引絵図」（広島大学図書館所蔵）は明治時代前期に作成された地籍図である。赤色で塗られているのが宅地であり、黄色で塗られているのが田畑である。街道は濃い赤色で引かれている。浄土寺のある山麓と口屋敷等の地名がある河川沿いの2ヵ所に集落があり、河川沿いについては短冊状の地割が整然と並んでいることからこの地域が荻原の宿場町であることが分かる。街道は町の北側の「地頭所屋敷」や「寺前屋敷」を通るものと「目代屋敷」あたりから西と南に分かれて続くもの、「貝詰」から川を渡って「新市道ノ上」で分岐するものが比較的太く描かれている。「新市道ノ上」から南へ分岐する街道は現在の地図上にはない道であるが、現地調査とその際に入手した資料（表2）でおおまかな位置を推定して復原している（図6）。また、細かく見ていくと、荻原の宿場町には「伝馬」や「口屋坂口」、「口屋敷」という字名が見られる。伝馬とは人馬の荷継を行うための宿駅であり、江戸時代は主要な街道に多く設けられた。口屋は先述したように税の徴収や抜け荷の取り締まりを行う場所であり、街道の入り口付近に設置されていることがわかる。短冊形の畑には「布屋敷」や「紺屋敷」、「米屋敷」の地名があることから、ここにはかつて商業機能があったことが推測できる。さらに、荻原集落内に陣屋の跡が残っていた。陣屋とは代官や地頭などの役人が公私の用務を取り扱う所であり、明治前期の地籍図における該当箇所には「目代屋敷」と記載されている。「目代」は江戸時代において、代官のことを指すため、商業機能に加えて、行政的機能も存在していたことがわかる。表2は現地調査で得た宿場町に関連する屋号と街道沿いに並んでいた屋号を示したものである。図6では、表2で示した屋号のある場所と街道を復原したものである。中でも①コーヤに関しては、図5にもみられる「紺屋」であると推察されており、聞き取りによると、屋敷は残っていないが昔は宿屋をやっていたということだった。③ヤマヤも同様に宿屋をやっていたということで、この辺りが宿場町としての中心であったと考えられる。

石見銀山は1620～1640年頃を最盛期として、それ以降は衰退していく。これに伴い、荻原のような「中通」の口屋も役人の数の問題もあり、次第に消失していく。具体的な年代はわからないが、正保期（1645～1648）の石見国絵図には「中通」の記載が見られるため、少なくともこれ以降に消失したと考えられる。これは市場としての価値が停滞してい

くことを意味する。この原因は市場の移り変わりであると考えられる。銀山柵内が主な市場であり、多くの人がここを目的地としてやってきた最盛期から次第に浜田城下町の繁栄など新たな市場が誕生することで人の通りが少なくなっていた。しかし、年に一度、銀山には幕府が大名に命じて銀を運ばせるという国役的役割があった。このため、インフラ整備も行われたことで銀以外の物流にも影響し、最盛期を迎えた後も人が一定数集まった。これにより、萩原のような町でも宿場が栄えた。聞き取り調査では、近年まで宿屋であった家を紹介してもらった。今でこそ現存する家屋も少なくなったが、当時の宿場町として栄えた名残を伺うことができる。

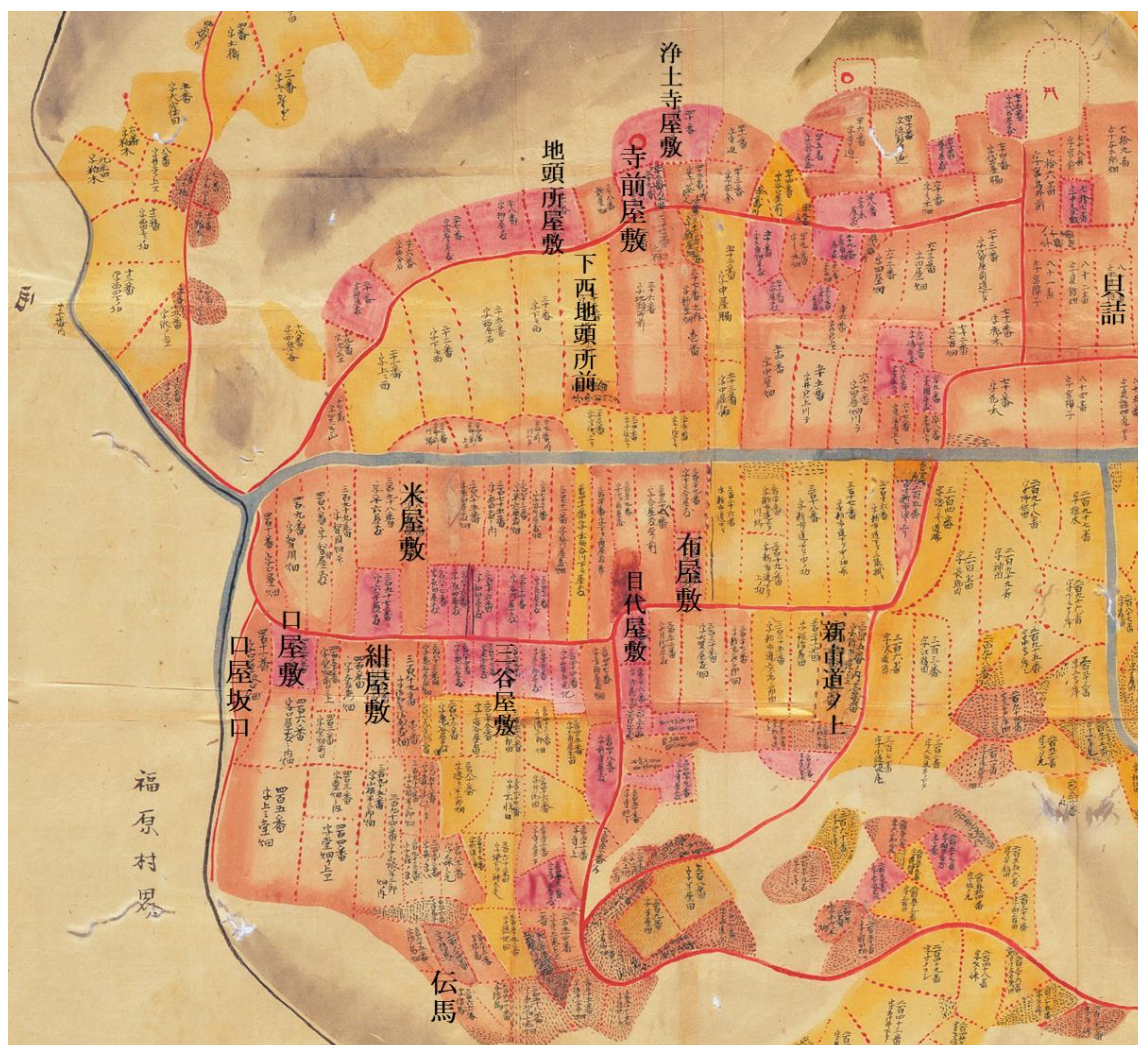


図5 「萩原村地引絵図」のうち宿場町の部分（広島大学図書館所蔵）
注）宿場の繁栄のわかる地名及び現在の屋号に残っている地名を加筆

表 2 荻原地区屋号一覧

番号	屋号
①	コーヤ
②	ミタニヤ
③	ヤマヤ
④	ジトウセ
⑤	テラノマエ
⑥	カイヅメ

(中田俊充様提供資料より作成)



図 6 荻原地区における街道、宿場町の復原

(中田俊充様提供資料及び広島大学図書館所蔵「荻原村地引絵図」より作成)

注：現地調査に基づき街道を加筆

V. 馬路地区における街道と口屋の復原

馬路地区には世界遺産の構成資産の一つとして登録されている鞆ヶ浦がある。鞆ヶ浦は銀山から最短距離にあり、銀山開発の初期である 16 世紀前半における銀鉱石の積出港と伝えられている。

図 7 では「元和石見国絵図」で見られた柵内からのびる道と湯里、天河内にのびる道、

及び番屋敷を復原している。現地調査では、正確な口屋の位置は確認できなかったものの、番屋敷の位置と跡地が港の入り口付近に確認でき、おそらく口屋もこの辺りにあったのではないかと考えられる。馬路のように港にある口屋の機能としては国内での小さな取引に対する課税に加え、外国船の見張りなど海防の役割も兼ね備えていた。銀山街道は、口屋峠と呼ばれる場所から鞆ヶ浦にかけて銀山街道が伸びており、がけ崩れの心配がなく、地形の変化の少ない尾根を伝って物資を運んでいたとされる。国道9号線の敷設により、一部銀山街道が分断されているが、現地調査をもとに復原を行った。「元和石見国絵図」では、銀山街道と山陰道の二つの街道が重なることを読みとることができた。南北に伸びる山陰道と銀山街道の分岐点に才の神という地名が見られるが、才の神とは道の分岐路を指す地名である。そのため、「元和石見国絵図」見られる街道の交わる場所はここであったと推察される。現地調査ではこの地に才の神を祀っている祠（写真1）も確認できた。ただ、国道9号線の敷設による街道の分断で本来あった場所から移動しているとのことだった。馬路は山陰道と銀山街道の交差点に面しているが、大森銀山から比較的に近い上、山陰道沿いには同じく港町であった温泉津が栄えていたため、萩原のように宿場町は発展しなかった。また、鳴砂で有名な琴ヶ浜沿いの地帯には現在多くの家屋が立っているが、それらの家屋は明治・大正に入ってから建てられ始めたものであり、かつてはその一帯まで砂が入り込んでいたという。こうした地理的な要因もあり、馬路は宿場町として発展することなく、国内での小さな取引を行う小規模な港湾地区にとどまったと考えられる。



写真1 才の神を祀る祠



図7 馬路地区における口屋と街道の復原

(出典：島根県教育委員会 『島根県歴史の道調査報告書第二集 山陰道Ⅱ』)

注：銀山街道及び山陰道を現地調査に基づき加筆

VI. おわりに

ここまで銀山が最盛期を迎える少し前の江戸時代初期に大森地区周辺の道路網がどのように整備されていたのかを元和石見国絵図を駆使してみた。現在の地図に復原したことで当時の絵図に描かれた情報をより正確に理解することができ、全体を通して、口屋と街道、宿場町という大森銀山を取り囲む周辺地域の空間構造が明らかになった。口屋の分布図及び概念図から、陸路では柵内、中通、外輪という三重の監視体制、そして海防の役割も果たした海岸沿いの口屋という4種類の口屋によって大森銀山を取り囲んでいたことがわかり、当時の大森銀山を中心に広がっていた口屋の空間構造が明らかになった。また、本稿では荻原地区と馬路地区という具体的な地区に焦点を当てて調査し、比較検討した。荻原地区では明治初期の地籍図から短冊形の地割や「伝馬」や「布屋敷」、「紺屋敷」、「米屋敷」の地名があることから商業機能があったことが推測できた。加えて陣屋跡や「口屋坂口」や「口屋敷」という字名が見られ、行政的機能も存在していたことがわかった。このように宿場町として栄えた荻原では、現在でもその名残が屋号に残っていることを現地調査で確認できた。しかし、銀山街道に面する荻原地区では宿場町の発展が見られたものの、山陰道に面する馬路地区にはそうした発展は確認できなかった。これは山陰

道に比べて大森銀山から伸びる放射状の街道が特に重要な街道であったことを示しているといえる。

今後は今回行った大森地区を中心とした口屋や街道、及び周辺地域の空間構造が時代によって、どのように変化したのかを明らかにすることが求められる。そのためには、元和石見国絵図だけでなく、異なる時代の絵図においても復原する必要があると考えられる。この点を今後の課題としたい。

—付記—

本稿を作成するにあたり大田市役所石見銀山課の遠藤浩巳様、石見銀山世界遺産センターの伊藤大貴様、石見銀山資料館館長の仲野義文様、現地調査にご協力いただいた中田俊充様、山根俊隆様をはじめその他多くの方にはお忙しい中にも関わらず大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

—参考文献—

- 池橋達雄 2006. 『定本 島根県の歴史街道』 樹林舎.
- 川村博忠 1999. 「元和年間作成の石見国絵図について」『歴史地理学』 41-3 40-54.
- 島根県教育委員会 1996. 『島根県歴史の道調査報告書第二集 山陰道Ⅱ』 報公社.
- 島根県教育委員会 1996. 『島根県歴史の道調査報告書第三集 銀山街道』 報公社.
- 島根県 HP (トップ/くらし/文化・スポーツ/文化財/世界遺産石見銀山遺跡/出版物)
https://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/ginzan/publication/publication.data/IWAMI_GINZAN202003.pdf
- 鳥谷芳雄 2017. 『石見銀山を読む—古図・絵巻・旧記・石州銀—』 報公社.
- 鳥谷芳雄 2018. 『続 石見銀山を読む—古図・絵巻・旧記・石州銀—』 報公社.
- 原田洋一郎 2011. 『近世日本における鉱物資源開発の展開：その地域的背景』 古今書院.
- 原田洋一郎 2010. 「石見銀山周辺における「町」を持つ村に関する基礎的研究」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』 4:91-100.

